

令和2年8月19日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 張 曉娜

学位論文題目 中国語における日源新詞の受容について  
(The acceptance of Riyuanxinci in Chinese)

#### 論文審査の概要

##### 1. 本論文の目的

“御宅族”（オタク）“达人”（達人）“萌”（萌え）等のように、1978年の中国の「改革開放」以来、中国語に入った日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。本論文は、日源新詞の取り入れに見られる言語形式面と言語使用面の特徴およびその広がりの実態を、言語使用者の社会的属性との関連で分析することを通して、日源新詞の受容の過程とその様相を検討し、言語学のみならずメディア論的知見も加えて日源新詞の国語化（中国語化）の問題を探求するものである。

##### 2. 本論文の構成

本論文は、目的や研究の方法を示した「はじめに」に始まり、第1～3章で「外来語」と「日源新詞」の概念の明確化と日源新詞の言語学的特徴の整理を行っている。これらの議論をもとに、つづく第4～5章では、質問紙調査の結果に基づいて新詞の受容過程を共時的、通時的視点から議論する。結語の「おわりに」では、本論文の意義が示される。

第1章は「中国語における外来語の概念について」である。論者は、まず中国語における「外来語」という概念に関する先行研究を精査し、本論文における「外来語」は、「他の言語から取り入れられて記号表現の面（音声面あるいは形態面）で借用が発生する語彙のことであり、具体的には、音訳語、逐訳語、そして借形語のことを指す」と定義する。第2章は「日源新詞の収集と得られた語の概観」である。前章の「外来語」の定義をもと

に、論者は本論における「日源新詞」を「1978年の中国の改革開放政策以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語」と定義し、その判別に、①語が外来語かどうか、②語が日本語由来かどうか、③語が新詞かどうか（1978年以後に輸入された語彙かどうか）という3つの基準を立てる。次いで論者は、この研究の対象となる日源新詞を、新詞辞書やインターネットなどのメディアから274語に絞り込み、その品詞と意味の分布の特徴を社会状況の変化を背景に検討する。その結果、品詞の分布は物・事などを表す名詞が圧倒的に多いこと、また新詞が意味する内容は、職業、年齢、性格や身振りなどの人物描写と衣食住などの文化の描写が中心ではあるが、その輸入時期には異なりがあり、中日関係の状況や言語接触の環境の変容などが影響していることを指摘する。

第3章は「言語形式面から見た日源新詞の受容—形態レベルと意味レベルの受容を中心に—」である。274語の形態と意味の受容を分析した結果、形態面では、①カナ（仮名）をローマ字に置き換えるなど新しい受容法の出現、②借形語の優勢、③音訳語の増加などが見られたこと、また意味の面では、①意味する範囲の拡大/縮小や語のイメージの変化などの変容、②漢字の意味理解への影響などがあることを論者は示す。また音訳語の増加には、語の輸入ルートの多様化、借用目的の変化など言語外の要因が関わっていることも指摘されている。

第4章は「言語使用面から見た日源新詞の受容—定着度調査を中心として—」である。本章では、274語中45語を抽出して行った質問紙調査の結果をもとに、語の定着度と地域、年齢などの日源新詞使用者の社会的属性との関連から、日源新詞の中国語化の程度の考察が行われている。分析の結果、45の調査語の定着状況は、全体としてある程度認知されているが、十分に知られていない語がまだ数多く存在し、これから定着に至るかどうかは不明という段階にあると論者は述べる。また、回答者の社会的属性との関連をみると、居住する都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を使用しており、地域と年齢が日源新詞の受容に関与する要因であることが示される。

第5章は「日源新詞の受容過程とその受容に与えるインターネットの影響—打 call（コール）を例として—」である。インターネットという新しい情報インフラの到来により、外来語の受容には注目すべき変化が生じている。この章では、“打 call”という語の受容過程を検討することを通して、インターネット経由で輸入される外来語が拡散する過程、および新詞形成に見られる形式面や意味面での現象が、メディア論的知見も加えて論じられる。

論者は、“打 call”の受容は、①まず都市部の若者の間でJ-POP およびサブカルチャー用語として始まり、②その後新たな意味が派生し、その派生的意味がネットTV番組やSNSでの大量使用によって一般のネットユーザーに広がり、③さらにマス・メディアでの使用によってさまざまな地域や年齢層に拡散したことを論じ、インターネット時代の外来語の普及と伝播のモデルを提示する。

さらに論者は、M. マクルーハンや W. J. オングらの議論に依拠して、近年の日源新詞受容に見られる変容を、インターネットという新しい情報技術の出現・普及とその結果もたらされたメディア環境の変化により生じる感覚秩序の再編という2つの次元で読み解くことを試みる。「技術論的な次元」においては、インターネットの普及がネットユーザーたちの発信者としての可能性を高めたことで、新しい受容法が生まれるなど、多様な言語表現が可能になったことが指摘される。また「意味論的な次元」においては、電子メディアの時代になって、文字レベルでも視覚に加えて聴覚による直接的な身体感覚が求められるようになったことが、音訳語や贅沢借用語の増加に繋がり、今後この傾向はさらに強まるという議論がなされる。

最後に「おわりに」では、本研究の意義とこれからの課題が述べられている。意義は、①日源新詞の意味分布の特徴を通時的に考察した点、②日源新詞の「国語化の程度」を実態調査により語の定着度で把握した点、③日源新詞の受容の変化と新たな電子メディアの普及による身体感覚の変容との関連を指摘した点にある。課題としては、論者単独での調査の限界や、新詞の意味分類が40年ほど前の分類に基づかざるを得なかったためにやや曖昧になったこと、また外来語受容の詳細な分析が“打 call”一語だけにとどまったことなどを挙げている。

### 3. 本論文の評価

#### 1) 評価されるべき点

第一に、先行研究の批判的検討をもとに、議論の前提としての外来語および日源新詞という概念の明確化を丁寧に進め、さらにそれをもとに分析対象とする日源新詞を辞書やコーパスなどを使って客観性を担保しながら絞り込むための手順を慎重に提示するなど、議論を手堅く展開している点を挙げることができる。

第二に、音訳語の増加やローマ字を混在させた新たな受容形式の出現など、近年の日本語由来の外来語受容に見られる新たな言語的的局面を整理したこと、加えて300人へのアンケートによる使用状況の実態調査で日源新詞が社会内で受容されていく様子をとらえることができた点である。

最後に、インターネットの普及によるメディア環境の変容と現在の社会状況の変化を取り入れて、外来語の受容をとらえる視点を提示した点にある。言語接触論という切り口で見ても、社会やメディアの状況の変化が言語に表出する事態をとらえる新たな知見が加えられた点は評価できる。

#### 2) 問題点

本論文のもっとも大きな問題は、外来語の受容を中国語における国語化（標準化）とい

う前提を立てて議論を始めた点である。新語・流行語の受容と拡散は、ある特定の集団という小さな言語空間内での現象として議論するほうがその本質をより明確にとらえることができる場合もある。しかしながら、本論文は外来語と日源新詞の絞り込みを詳細に行ったため（これが本論文の長所でもあるが）、中国語という大きなレベルで新詞の現象をとらえる方向に議論が限定されてしまった点が惜しまれる。

そのほか、論者が想定している外来語受容の環境が十分ではないことや新詞拡散のプロセスを量的な積み重ねとしてしかとらえていないなど、議論の枠組みの立て方に視野の狭さが見られること、また外来語の研究なのかそれとも日本語と中国語のあいだに見られる現象の研究なのかという研究の立ち位置が曖昧であることなどの問題点も指摘された。

#### 4. 総合評価

本論文には、上記のようないくつかの問題があるものの、先行研究の議論を慎重に整理して新語研究における調査語の抽出法に新しい基準を示したこと、話者属性との関連から見た新詞の使用実態というこれまで議論がされていなかった問題に取り組んだこと、またメディア環境など新たな要因を組み込んだ新詞の受容モデルを示すなどの一定の成果を上げている。そのため、審査委員は全員一致して博士（学術）の学位を授与するに値すると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果  合・否

審査委員

主査 太田一郎

副査 尾崎 有宏

副査 丹羽 謙治

副査 中島 祥子